現代日本語の敬語についての基礎知識

李寛子

第一章　序論

国立国語研究所の調査によると、人は一日の四二パーセントは言葉を話していると言う。人生七十年間とすると、約三十年間という計算になる。まさに人生の一大事であると言えよう。

タテ社会の人間関係を持つ日本の社会において、豊かな人間関係をつくり、自分の意思を正確に伝え、人をひきつけ信頼されるために、私達は毎日の生活のなかで、さまざまな人間関係にぶつかって迷っている。

言いたいことが通りさえすれば、まず言語の第一義が成功で、敬語は二の次のことだと考えられている。しかし、日本語の特色と言う場合に、よく人が話題にすることに敬語の問題がある。敬語というのは、話題に出てくる人に対する敬意、あるいは、話の相手に対する敬意を表わす言葉である。

言語の位相という考え方を、どの範囲まで及ぼしてよいかは大きな問題であるけれども、たとえば「おっしゃる」と「申す」のような対比が日本語の中にあることは、注目すべきであろう。敬語的表現はどの国にもあって、敬語が日本語の特色である、独占物であるというような考え方はできないけれども「言う」という動作、行為を二様にも三様にも表現するのは日本語の特色である。

日本語では時に「食う」と言い、時に「食べる」と言い、時に「召しあがる」あるいは「あがる」と言い、時に「頂く」と言う。

日本語には、尊敬の助辞を伴わなくてその語の性質上、それ自身に一定の敬意を含むいくつかの動詞がある。それらは尊敬される第二人称および第三人称に対してのみ使われる。

それとは別の動詞で、一定の丁寧と謙遜の意を持ったものがあって、目下の者から目上の人に対して使われる。これらはその語を使って話す場合の話し手なり、その座にいる人なりに敬意を払い、その動詞の示す動作をする者にその語を使って話す者を卑下させるのである。

たとえば、

尊敬	通常	謙譲
いらっしゃる	いる	おる
いらっしゃる	行く、来る	まいる
おっしゃる	言う	申す
めしあがる	食べる	いただく
おぼしめす	思う	存ず
ご覧になる	見る	拝見する

敬語はもちろん「行かれる」のように助動詞によっても生まれるし、「お言いになる」「お持ちする」のように「お……になる」「お……する」の形式によっても生まれるともいえる。けれども基本動詞の類では全く別な語が用いられる場合があり、日本語の表現の特色になっているのである。

敬語に関しては、すでにいろいろと発表されておるが、本文では、敬語の使い方を系統的に整理総合して、更に「六、授受動詞」「七、複合動詞の敬語法」を加え、学習者のご参考になればと願っている。

第二章　私の整理

一、敬語の意義

敬語の表現は、尊敬語、謙譲語、丁寧語（丁重語、美化語）が、皇室用語となり、女性用語となり、子供用語となり、報道用語となり、一般社会人用語となって、使われている。

適切な敬語を使うことが必ずしも容易でない事情は、敬語決定の基準が相手との上下関係であり、しかもその上下は、話手が主観的に測定するより手のない場合が多いことである。上下関係には単に上か下かという二つの方向のほかに、上下の開きの大小があって、これが敬語の強弱に関係する。又話し手、聞き手、為手、受け手が同一の集団に属しているかいないかによって、そこに「うち」「よそ」の意識が生じる。

敬語は、話題の人や聞き手を話し手がどういう関係の人と、とらえるかによって、使い分けられる。要するに、上位の人としてとらえるか、対等もしくは下位の人としてとらえるかによって、敬語的言葉づかいが決まるのである。

敬語はやさしく簡素に、その場合に応じ、その時に応じて、適切に、失礼にならないようにすべきである。

二、謙譲語

話し手が自分もしくは話題の中の人物の一方を低めることによって、間接的にもう一方に対する敬意を表わしたもの。

謙譲の表現法

①名詞を用いる。

わたくしは学生です。

ぼくは会社員です。

小生、この度本社に栄転いたしました。

などのほか、接頭語、接尾語のついたもの、特別な漢語、たとえば、愚見、小生、拙著、微意、拝借、など。

②謙譲の意味を含む動詞を用いる。

・夜分に伺いまして相すみません。

・あとから私もすぐ参ります。

・ぜひいらっしゃるように父が申しておりました。

「伺う」は尋ねる、聞く、行くの意味。

「お目にかける」は見せるの意味。

「お目にかかる」は会うの意味。

「申す、申しあげる」は言うの意味。

③謙譲の意味を表わす補助動詞を用いる。

・あなたのことは、お聞き申しております。

・私もお手伝いいたします。

・拙宅までの地図を書いてあげます。（さしあげる）

④謙譲の意味を表わす動作名詞と補助動詞を用いる。

・それは私がいたします。

・ご高名は承っております。

・それは存じあげております。

「いたす」はするの意味。

「お耳に入れる」は聞かせるの意味。

「承る」は聞くの意味。

「存ずる」は思う、知っているの意味。

・詳しく説明していただきました。

・本日は休ませていただきます。

・すぐご通知いたします。（ご通知申しあげます。）
・これだけはご承知いただきます。（ご承知ねがいます。）

⑤使役動詞に謙譲を表わす補助動詞を用いる。

・早速お知らせいたします。（お知らせ申します。）
・そのテキストをお見せいただきます。（お見せねがいます。）

「お知らせする」「ご通知する」など、自分の行為に「お」や「ご」をつけるのはどうかという疑問が出るが、これには相手に直接関係する、あるいは影響を及ぼす行為を表わす言葉につけるという限定がある。

・大学であの先生に日本語をお習いしました。
・社長から事情をお聞きしています。

などは、受身的な行為だが、やはり相手に直接関係する行為なので、この謙譲語は成り立つ。

「あげる」「〜てあげる」は、敬意がかなり軽い。後述のように美化語に転化する傾向も、一つにはそこから生まれている。

⑥謙譲の意味を表わす接頭語、接尾語を用いる。

・わたしどもがいたしましょう。
・弊店は来る五月五日に開業いたします。
・喜んでご案内いたします。

⑦慣用形式：動詞、申す、申しあげる、あげる、さしあげるの使い方とその他。

「申しあげる」「さしあげる」は「申す」「あげる」より敬意が強い。

(1)皆さんにお礼を申します。　　皆さんにお礼を申しあげます。

(1)遠慮なく頂きます。[illegible]

(2)花をあげました。[illegible]

(3)これはどういたしますか。

(4)早速参ります。[illegible]

(5)お目にかかりたいと思います。

(6)先生から本を頂きました。[illegible]

(7)それはもう伺いました。

(8)そんな事は存じません。

お伺いしたいと存じます。

(9)ご高名は、かねがね承っております。

今日、早速伺います。

⑧補助形式：補助動詞申す、申しあげる、いたす、する、あげる。

申す

A お動詞連用形＋申しあげる　　お話し申す（申しあげる、いたす、する）

お書き申す（申しあげる、いたす、する）

いたす　　お読み申す（申しあげる、いたす、する）

する

◎「申す」を補助動詞として使った場合、その元来の意義が消滅して「いたす」と同様に謙譲の意味を表わす。

◎「お……申す（いたす）は「お……する」より敬意が強い。

◎「お……申しあげる」は「お……申す（いたす）」より敬意が強い。

B 動詞連用形＋て＋あげる　　書いてあげる

話してあげる　　読んであげる

三、尊敬語の表現法

話し手が、敬意の対象となる人およびその人の動作、状態、その人の持っているものなどを敬って言う言葉。

尊敬の表現法

①名詞を用いる

・あの方はどなたですか。

・ご結婚おめでとうございます。

・ご芳名を承ります。

・ご高見を拝聴いたします。

・貴兄のご意見を乞う。

などのほか、あなた、この方、貴下、貴殿、先生、○○様、○○さん、○○殿、○○氏、社長、局長、課長、師匠、関取、尊父、がある。上級の職名、職業名なども尊敬語になる。

②人に属する物、事を表わす言葉を用いる。

(1)接頭語

お考え、芳名、令室、貴家、高著、おん身、おん中、ご感想、ご住所、おみ足、おおみ心、ぎょ衣、み心、「芳名」「高著」「令室」などはすでに尊敬語だが、これに「ご」をつけて使われることが多い。理屈から言えば二重敬語だが、かなり一般的な習慣になっているので、不適当だとも言いきれない。「お見えになる」も二重敬語的構造だが、これもよく使われる。

(2)接尾語

皆さま、叔父さま、奥さま、お父さま、兄さん、お前さん、赤ちゃん、坊ちゃん、姉ちゃん、殿方、先生方、校長先生、林氏、兄上、姉御、姉君、母君、一夫君、川口殿、

③人を指し示す場合の敬語の使い方

A自分を指す場合

(1)「わたし」を標準とする。
(2)「わたくし」は改まった場合に用いる。
(3)「ぼく」は男子学生の親しい関係では用いるが、社会人としては用いない方がよい。
(4)「自分」「おれ」などは用いない方がよい。

B 相手を指す場合

(1)「あなた」を標準とする。
(2)「きみ」は親しい間柄だけに用いる。
(3)「貴殿」「貴下」は手紙文に用いられているが、しだいにすくなくなっている。

C 第三者を指す場合

(1)「○○さん」を標準とする。
(2)「○○さま」は手紙のあて名の時に用いる。
(3)「先生」「課長」「主任」などに「さん」「殿」は不必要である。

④尊敬の意味を含む動詞を用いる。

・お客様がいらっしゃいました。
・どうぞめしあがって下さい。

⑤尊敬の意味を表わす動作名詞と補助動詞を用いる。

・先生がお書きになる。お書きなさる。お書きあそばす。

⑥尊敬の意味を表わす補助動詞を用いる。

・その理由を、どうか話して下さい。

⑦尊敬の意味を表わす助動詞を用いる（れる、られる）

・先生は、今本を読まれるところです。

・お客さんが、今晩家へ来られる。

・先生も、同じような万年筆を買われた。

この型のいい点は、五段、上一段、下一段のあらゆる動詞が「れる」「られる」の助動詞を規律的に用いて、尊敬の意味を表わすことができることである。

⑧尊敬の意味を表わす接頭語、接尾語を用いる。

・ご主人は、いらっしゃいますか。

・二十名様とも、ご乗車になりました。

そのほか、接頭語と接尾語を一緒に使う場合もある。

お孫さん、尊父様、お子さん、お医者さん、

⑨「お」接頭語のつかない語

(1)外来語にはつかない

×おスリッパ、おエスカレーター。

(2)「お」の音で始まる語

×お応接間、お大きい、お追い越す、お大変、

おおしゃもじ

(3)モーラの多い長い語

×おえはがき、おおしゃくじ、

(4)悪感情下品の語

×おつら、おやっつけになる、おずらかる、

(5)自然に関する語と色

×おさくら、おうなぎ、お天丼、お青、お赤、お自然、お形、

(6)「お……になる」の形が使えない語

×おすごみになる、試験にお落ちになる、お死になる。

(7)「……れる、られる」の形が使えない語

×よくできられました。もう分られましたか。

行けられる。見えられる。書けられる。

⑩「お」をつけるか「ご」をつけるか

・和語系統のものは「お」がつき、漢語系統のものには「ご」がつくという傾向があると一般的に言えるが、必ずしもすべてがそうではない。

・おかず、おさしみ、おこさん、おはな、

・ごかぞく、ごしさつ、ごあんしん、ごふうふなどはふつうの例である。けれども「お」が漢語系統の語についている例もすくなくない。

・おいしや、おべんとう、おりょうり、おきゃく、おでんわ、おしゅうじ、おけが、

又「お」「ご」両方がつくものもある。（意味の区別がある）

・おじょうぶ、ごじょうぶ、

・おべんきょう、ごべんきょう、

・おじょうぶ、おべんきょうは美化語、ごじょうぶ、ごべんきょうは尊敬語である。

◎自分の目上にあたる身内のことを他人に話すとき、原則として尊敬語を使わない。

⑪慣用形式：補助動詞なさる、なる、下さるの使い方

A お＋動詞連用形＋に＋なる　　お書きになる
　お話しになる　　お読みになる

B お＋動詞連用形＋なさる　　お書きなさる
　お話しなさる　　お読みなさる

◎Aの使い方はBより敬意が強い。

C ご＋漢語＋に＋なる　　ご旅行になる
　ご覧になる　　ご見物になる

D ご＋漢語＋なさる　　ご旅行なさる
　ご覧なさる　　ご見物なさる

◎Cの使い方はDより敬意が強い。

E お＋動詞連用形＋下さる　　お書き下さる
　お話し下さる　　お読み下さる

F 動詞連用形＋て＋下さる　　書いて下さる
　話して下さる　　読んで下さる

◎Eの使い方はFより敬意が強い。

⑫形容詞、形容動詞に「お」「ご」をつける。
　お美しい、お懐しい、お静かだ、ご熱心だ、ご立派だ、
⑬副詞に「ご」をつける、
　ごゆっくり、

四、丁重語の表現法

丁重語とは、聞き手に対して、特別の配慮をもち、直接聞き手に敬意を表する敬語である。（聞き手に敬意を表する点では、前述のように謙譲語の中のある種のものも、これと共通の性質をもっている。）

①丁重の意味を含む動詞と助動詞「です」「ます」を用いる。

・兄はあす帰って来ます。

・それが妹の写真です。

丁重語の場合は、話題の人を高めるとか、低めるとかいう関係は、いっさいない。ただ聞き手に敬意を表する、だけである。たとえば「兄は明日帰って来ます。」という文では、「兄」が話題の人ではあるが、「ます」という丁重語は「兄」を高めているのではない。聞き手への配慮から「ます」は使われているのである。

だから「先生がお帰りになる。」のように、話題の人「先生」を高めて尊敬語を使っても、聞き手に対する丁重語は使わない言い方も、きわめて普通に行なわれる。

②動詞の「ございます」と補助動詞の「ございます」。

ここで注意しなければならないのは、同じ「ございます」でも、「ある」の意味を含む「ございます」は動詞、丁重の意味を表わす「ございます」は補助動詞である。

たとえば

・まだ時間がございます。は動詞

・わたしの家の近くに公園がございます。は動詞

・この辺りは静かでございます。は補助動詞

・よいお天気でございます。は補助動詞

「ありがたい」「おめでたい」「おはやい」の形容詞に補助動詞「ございます」をつけると丁重を表わし、形容詞の語尾に音便をきたす。なぜならば「Ku」から子音の「K」が落ちて「い」になったのである。その時語幹の一部に変化をきたす。

（形容詞の音便）

③動詞の「申す」「いたす」「おる」を用いる。

（謙譲と丁重に使われる。）

・これは桜の花と申します。

・では、これで終りにいたします。

・公園に人がたくさんおります。

④動詞未然形＋で＋下さい

います　・何処へも行かないで下さい。

ごらんなさい　・何時も宿題を書かないでいます。

・甘いものを食べないでごらんなさい。

五、美化語の表現法

美化語は、話題の人や聞き手に敬意を表する敬語とは違う。聞き手への意識がないとはいえないが、自分自身の言葉の飾

りとして使われるものである。

美化語は、性質上、一般に男性に比べて女性の方が多く使う。とくに「お」を頭につける言葉を女性が多く使う。ある程度これは自然の現象として認められよう。又美化語を使って自分の品位のために使われることもある。なお「お」は尊敬にも使われる。

「お住いはどちら？」の「お」は尊敬語、「お人形をつくる」の「お」は美化語である。

◎真の敬語を表わす「先生のお話」「ご出席」や慣用的に使われる「おしろい」「おでん」「おかず」「ごらん」などの「お」と「ご」はつけるのが普通である。

「あなたのお性」「ご意見」などのように、「あなたの」の意味のあるものは「お」「ご」をつけてもよい。たとえば慣用的に使われていない「ご今息」「お机」などはゆきすぎであると思う。

六、授受動詞

「やりもらい」という表現は、少なくとも二人の人間の間での恩恵、利益を、与える側と受ける側という人間関係から成り立つものである。この「やりもらい」を表わす授受動詞に「やる、あげる、さしあげる」、「くれる、くださる」、「もらう、いただく」と言う一つの体系がある。この体系は行為主体、話者の観点、敬語の三つの軸から成る。本動詞として使われる場合は物の授受を表わし、補助動詞として使われる場合は、好意の授受を表わす。

「やる、あげる、さしあげる、くれる、くださる」は主語に物、又は好意の与え手をとるから授動詞、「もらう、いただく」の場合は主語に物、又は好意の受け手が来るから受動詞と呼ぶ。

(一)本動詞として

(1)先生が学生に鉛筆をやる。　（目上が目下に）

(2)私は陳さんに鉛筆をあげる。　（同じ位相、目下から）
(3)私は先生に鉛筆をさしあげる。　（目下から目上に）
(4)友達が私に鉛筆をくれる。　（同じ位相、目下から）
(5)先生が私に鉛筆をくださる。　（目上が目下に）
(6)私は弟に鉛筆をもらう。　（目上が目下に）
(7)私は先生に鉛筆をいただく。　（目下が目上に）

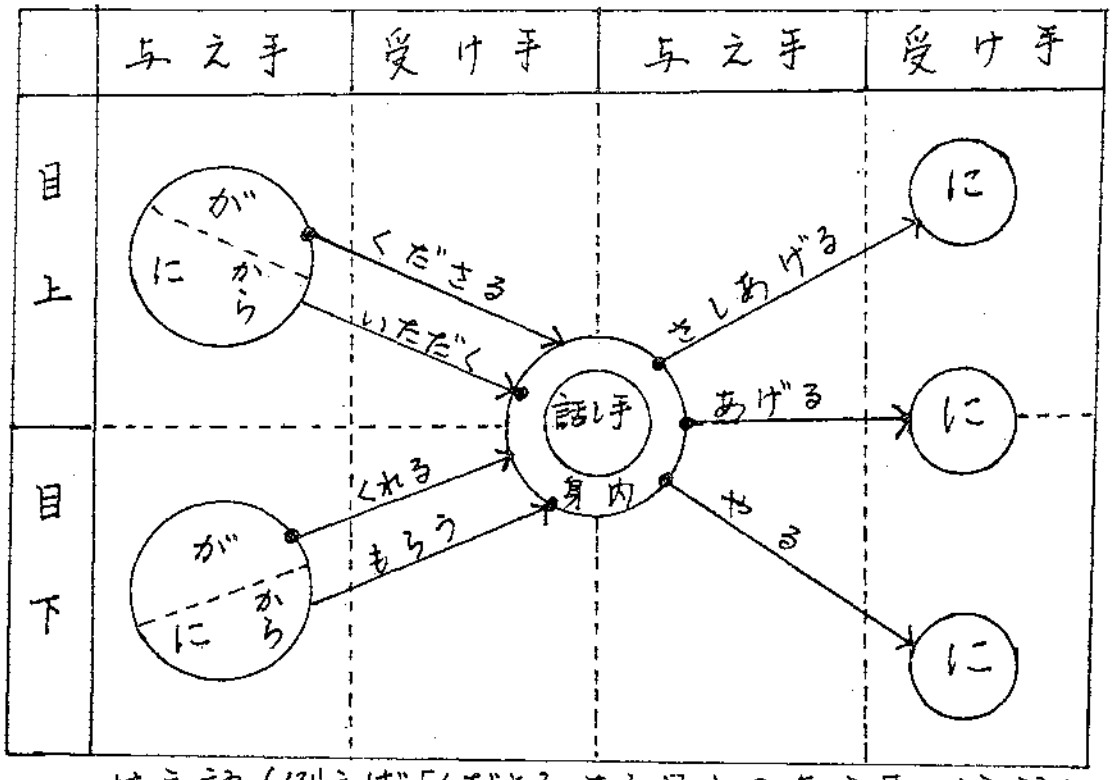
(二)補助動詞として

(1)私は弟に絵をかいてやる。　（目上が目下に）
(2)私は友達に絵をかいてあげる。　（同じ位相、目下から）
(3)私は先生に絵をかいてさしあげる。　（目下から目上に）
(4)友達が私に絵をかいてくれる。　（同じ位相、目下から）
(5)先生が私に絵をかいてくださる。　（目上から目下に）
(6)私は弟に絵をかいてもらう。　（目上から目下に）
(7)私は先生に絵をかいていただく。　（目下から目上に）

次の説明図は、与え手と受け手からなるやりもらいの主語と助詞を分りやすく記したものである。この図を理解すれば、授受動詞が、他のどの動詞の補助動詞になっても、理解に苦しまないであろう。

(三)授受動詞が「借りる」「貸す」の補助動詞になった場合

(1)私は先生に字引を貸してあげる。（さしあげる）



● は主語（例えば「くださる」なら目上の与え手が主語）
円内の助詞は、やりもらいの相手を示す。

(2)私は弟に字引を貸してやる。
(3)先生は私に字引を貸して下さる。
(4)弟は私に字引を貸してくれる。
(5)私は先生に字引を貸していただく。
(6)私は弟に字引を貸してもらう。

以上は二人の間の動作。

(1)私は先生に林さんから字引を借りてあげる。（さしあげる）
(2)私は弟に林さんから字引を借りてやる。
(3)先生は私に林さんから字引を借りて下さる。
(4)弟は私に林さんから字引を借りてくれる。
(5)私は先生に林さんから字引を借りていただく。
(6)私は弟に林さんから字引を借りてもらう。

以上は三人の間の動作。

中国語では「貸す、借りる」とも同じ動詞「借」を用いるので中国人の学習者の場合には、はっきりと区別してかからなければならない。「貸す」に授受動詞を補助動詞とした場合は二人の間の動作、「借りる」に授受動詞を補助動詞とした場合は三人の間の動作で、事物の所持者は第三者であることに気をつけるべきである。

(四)授受動詞の三組のうち、「あげる」と「もらう」の組には、尊敬形「お……になる」と「……られる」の形を用いる場合がある。

やる：おやりになる、やられる　　あげる：おあげになる、あげられる

一一六

もらう：おもらいになる、もらわれる

・先生はお子様に絵本を読んでおあげになりますか。
（あげられますか。）

・先生は毎朝小鳥に餌をおやりになりますか。
（やられますか。）

・先生はご主人に家庭サービスをしておもらいになりますか。
（もうわれますか。）

(五)「受身の形」「……てくれる」「……てもらう」のいずれを用いても、受け手側に視点がある。たとえば、台湾には「老人茶屋」という結構な老人達の集いの茶屋がある。そこで

①出されたお茶を一口飲んだ。
お茶が出たことと飲み手の希望とは特別にかかわりがない。

②お茶といっしょに出してくれた落花生をつまんだ。
落花生を出した店主の意思が働いている。

③お茶といっしょに出してもらった落花生をつまんだ。
これは飲み手が頼んで出してもらったことが、はっきりしている。

以上のいずれにしろ受け手側に視点があることが分る。

(六)「使役動詞＋いただく」の形が日常会話に多く用いられている。この形はなかなか外国人学習者の口からは出にくい（使いにくい）言い方である。

・おじゃまにあがらせていただきます。
・ご意見を聞かせていただきます。
・本日、休ませていただきます。
・このプレゼントは、私が買わせていただきます。
・明日台中へ行かせていただきます。
・そのパーティに、私も参加させていただきます。
・あなたの論文を見せていただきます。或は拝見させていただきます。

七、複合動詞の敬語形

「読み始める」「読み続ける」「読み出す」の敬語形には、

「お読みになり始める」と「お読み始めになる」

「お読みになり続ける」と「お読み続けになる」

「お読みになり出す」と「お読み出しになる」

の二通りがあるとする。そして

「大野さんが新聞をお読みになり始める」において、「読む」に「お……になる」が付加されているのは、主語の大野さんに対する尊敬を表わすためであり、「始める」に尊敬を表わす「お……になる」が付いていないことは、始めるの意味上の主語が大野さんではないことを指していると考えられる。又

「大野さんが新聞をお読み始めになる」は「読み始める」全体に「お……になる」が付加されていて、「読む」「始める」の主語は共に大野さんであり、大野さんに対する尊敬を表わしていると考えられる。

AとBからなる複合動詞の場合、Bが他動詞なら、文全体の主語は、意味上AB両方の主語であるので、全体に「お……になる」が付加される。Bが自動詞なら、文全体の主語は、Bの意味上の主語ではない。それで「お……になる」はAだけに付加され、Bには付加されない。

「倦きる」は自動詞である。「倦きる」をBとした場合、「お……になる」はAにだけ付加されるのである。

たとえば、

「お食べになり倦きる」は「お食べ倦きになる」とは言わない。食べるの尊敬語は「召しあがる」であるから、これは「お召しあがりになり倦きる」と言わなければならない。

「見る」も同じように、「お見になり倦きる」とは言わず、「ご覧になり倦きる」と言わなければならない。

八、女性用語

①女性のことばでは、必要以上に敬語または美称が多く使われている。たとえば「お」のつけすぎである。

「お」は室町時代のいわゆる女房詞から始まり、江戸時代に入って女中詞に盛んに「お」がつけられるようになったと言われている。今日では、身の回りの物、食料品、日常生活で使われるような語には、大抵「お」がつけられ、「お」の乱用という現象が現われた。とかく女性は上品に言おうという気持ちがあると同時に、子供に対して優しさを示す気持ちの現れから、自然に「お」が多用される結果になった。日本語は音韻が単純であり、一音節、二音節の語が多いため、類音異語を識別する上からも「お」をつけたくなるのかも知れない。

②女性用語は一般に「です体」「ます体」が使われ、豊富な敬譲語の使用によって、女性的な感じを人に与える。

③接続形の場合、間投助詞の「ね」が用いられたり、「いらっしゃる」「下さる」「なさる」「おっしゃる」の尊敬動詞を補助動詞に用いたりする。

・早く行ってね。　・帰りに買ってね。
・歩いていらっしゃる。　・書いて下さる。
・お話しなさる。　・続けておっしゃる。

④「です体」「ます体」に終助詞、「わ、よ、な、ね、もの、こと」をつける。

・買いますね。（買うね）　相手に念を押す。
・買いますわ。（買うわ）　自分の気持ちを表わす。
・買いますか。（買うよ）　相手に自分の動作を示す。

・買いますな。（買うな）　命令的に相手の動作を制止する。
・買いますの。（買うの）　自分の気持ちを表わす。
・よう買いますこと。（よう買うこと）　感嘆を極度に表わす。
・買いませんもの。（買わないもの）　不平不満を表わす。
・買いましょうね。（買おうね）　自分の気持ちを表わし、相手をも勧誘する。
・買いましょうよ。（買おうよ）　勧誘を表わす。
・おいしいですね。（おいしいね）　相手の同意を求める。
・おいしいですわ。（おいしいわ）　自分の気持ちを表わす。
・おいしいですよ。（おいしいよ）　相手に知らせる。勧誘。
・おいしいですな（あ）。（おいしいな（あ））　感嘆を表わす。
・おいしいですこと。（おいしいこと）　感嘆を極度に表わす。
・おいしいですもの。（おいしいもの）　不平不満を表わす。

⑤「の」を疑問助詞「か」の代りに用いる。

・なぜですの。（なぜなの）　・行きますの。（行くの）
・買いませんの。（買わないの）　・何方へいらっしゃいますの。（何方へいらっしゃるの。）

⑥「わ」・「の」を介して「よ」をつけ、敍述機能を表わす。

・怪我をしても知らないわよ。　・あの人は意地悪だわよ。
・言うことを聞かなきゃ、罰があたるわよ。　・ここから行くのよ。
・私も知らなかったのよ。

九、子供用語

子供になりきった気持ちで、子供用語を使うことによって、子供に親密感を与え、親頼をも持たせる言い方である。子供は女性と同じく発問にも「の」を使う傾向がある。

・兄ちゃんも行くの。
・これ、食べてもいいの。（発問）
・もう遅いから寝るの。
・明日から幼稚園へ行くの。（断定）

十、報道用語

報道文章に扱われる一般の人の敬称は、以前のような「氏」「女史」などのような冷い表現はよして、なるべく「さん」「ちゃん」に統一することになった。「さん」は親しみを感じさせる敬称である。

新聞では事件の容疑者や犯人には敬称をつけない。疑いが晴れてまた敬称がつくといった矛盾もあるが、新聞の生い立ちからして勧善懲悪の気分がある、のである。役職名のはっきりしている場合は、姓の下に役職名がつく。たとえば「三木首相」「佐藤安弘最判長」「石橋委員長」「林所長」など。また「営務取締役鈴木一郎氏」と「氏」をつける場合もある。

社内報、機関紙などの場合はいわば身内のもので新聞とは若干の相違が出て来るのは当然である。つまり同じサークル内の人々であるといった近親感が敬称の中にも現れる。「社長」「専務」「課長」「係長」など役職をそのまま使い、下級職については「さん」のほうが適切だと思う。

普通不特定な人を指す場合は「男」「女」を使うが、善行の主で姓名が不明の場合は「男の人」とか「女の人」とかいうふうに「男」「女」よりも丁寧に使う。

一般の新聞では、皇室以外の人々に対して敬語動詞は使わないことになっている。しかしこれにも例外がある。

「長寿日本一の梅田トミさんが三十一日午前一時、熊本大付属病院で亡くなった。百十二歳。老衰だった。」

この「亡くなった」は敬語で、ふつうなら「死亡（した）」と使うが、百十二歳の長寿者であるがゆえに使われた。

報道文の一部には、読者に対する敬語もある。誤った記事を載せた場合の「おわび」、定価値上げなどの「お願い」、催し物の「お知らせ」などである。このような文章は、告知文とよく似ており、お客様である読者に語りかけるので敬語が使われている。ただ、あまり商業敬語に類した敬語は報道にふさわしくないので、控え目にしている場合が多い。

十一、皇室用語

一般的に用いられている「れる」「られる」型は普通の敬語、「お（ご）……になる」は高い敬語である。

「お……遊ばせ」は最高の敬語として宮廷に於いて用いられ、一般庶民には用いられなかった。とくに高貴な人物は、自分の動作について尊敬語を用いることがある。これは文法的には破格で、天皇などの特定な人物に限られ、これを自尊敬語とも言う。本動詞と補助動詞とは、ともに尊敬語であり、補助動詞は「たまふ」「おはします」などである。「おはします」の用いられた表現は、最高敬語であり、天皇、上皇ぐらいにしか用いらない。最高敬語の主なものは、つぎのようなものである。

せ・たまふ。たまふ。れ・たまふ。られ・たまう。

せ・おはします。させ・おはします。

現在使われている皇室用語の基準は左のとおりである。

行幸、行啓―ご旅行　　玉座―お席

御座所―お居間　　便殿―お休み所

行在所―お宿　　お召し列車―特別列車

天覧、台覧―ご覧になる
供奉―お供
勅語―お言葉
勅裁―ご裁可
玉顔、龍顔―お顔
宝算―お年
還幸、還啓―お帰り
献上―差しあげる
下賜―……を賜われる
勅命―お命じになる
玉体―お体
玉音―お声
ご不例―ご病気
伺候―伺う
奉上―申しあげる
拝謁―お目にかかる

摘要旨

本文は日本語の敬語の使い方を、系統的に整理総合し、外国人に対する日本語教育の問題点である敬語の使い方を説き示したものである。敬語という語法は、きわめて日本的であることは言うまでもない。

「心の交流は話し方による」敬語は社交の間にあって、人々の相推譲する意を表明する一つの方法である。人は人として相交する間に、互いにその人格を重んじ、その才能知識、徳望、品格等を尊ぶに於いて、それを言語によって表明することにある。

わたしたちは、敬語を新時代に合うように保存して、社会生活の歯車の油とも、あるいは、お互いを尊重し合うアクセサリーとも、役立てて行くことが、わたしたちのこれからの在り方であると信じる。